

観光都市長崎におけるバリアフリー化の現状調査と提言

長崎大学大学院 学生会員 ○利根 佳享

長崎大学大学院 学生会員 久井 英行

長崎大学工学部 学生会員 大平 達朗

長崎大学大学院 正 会 員 後藤 恵之輔

1. はじめに

長崎には、原爆の爪痕を記した施設や西洋文化の香り漂う洋館等、多くの観光施設があり、毎年数多くの観光客がこの地を訪れている。そのような観光都市である長崎にとって、各観光施設のバリアフリー化を図ることは大変重要なことである。

本研究では、高齢者や身体障害者が長崎を訪れて、安全で安心して楽しく各観光施設を巡ることができるように、バリアフリー創造を行うことを目的とした市民団体である¹⁾、観光長崎バリアフリー創造塾の調査結果をもとに、調査当時の状況と現在の状況の変化を確認し、観光都市長崎が、今後どのようなバリアフリー化を進めていくべきかを提言することを目的としている。

2. バリアフリーアトラスについて

バリアフリーアトラスとは、観光長崎バリアフリー創造塾が、長崎市内の各観光施設を調査した結果をまとめた成果報告書である。バリアフリーアトラスでは、14の観光施設、5つの交通関連施設、3つの宿泊施設を調査報告しており、バリアの状態とそれに対する改善策が提言されている。

調査は2001年と2002年に行われており、成果報告書であるバリアフリーアトラスは2003年3月に完成し、各観光施設や市役所等に配布され提言を行っている。そのため、2004年現在、調査箇所に何らかの改善がなされている可能性がある。そこで各観光施設を改めて調査するとともに、バリアフリーアトラスを改訂していくことが必要不可欠な事項となっている。



図 - 1 バリアフリーアトラス (長崎市平和公園周辺) ²⁾

3. 長崎市平和公園周辺における現状調査と提言

長崎市平和公園周辺は、平和都市長崎の中心的場所であり、修学旅行生や外国人を含め、毎年数多くの観光客が訪れる場所である。そのため、施設内のバリアフリー化を図ることはもちろんのこと、施設周辺のバリアフリー化を図ることも重要である。しかしながら、バリアフリーアトラスには、数多くのバリアが報告されており、改善が求められている。以下に、それらのバリアが2004年現在どのような状態であるかを述べる。

3.1 モニュメント

写真 - 1 は、2001年に調査した時の平和公園内のモニュメントである。このモニュメントは、背の高い植栽に囲まれており、車いすに乗った状態ではモニュメントに書かれている紹介文が見えにくい状態となっている。そのため、紹介文の前の芝を刈り取るなどの対策が必要であると提言した²⁾。

写真 - 2 は、2004年に調査した時のモニュメントである。モニュメントの前にあった背の高い植栽が、半分ほどに刈り取られており、車いすに乗った状態でもモニュメントに書かれている紹介文が見える状態になっている。

3.2 正面入口

写真 - 3 は、国道206号線沿いにある平和公園の出入口である。この出入口は、路面電車を降りてすぐの所にあり、平和公園の主要な出入口となっている。しかし、長い階段しかないため車いす使用者には利用することができず、高齢者にとっても昇り降りがつらい状態となっている。そのため、階段にミニモノレールを設置し、車いす使用者が昇り降りできるようにするなどの対策が必要であると提言した²⁾。

2004年現在、この出入口には何の対策も立てられておらず、車いす使用者には利用することができない状態のままとなっている。ミニモノレールの設置が望まれるが、それが困難な場合は迂回路を示し、他の出入口から平和公園内に入れるようにするなどの対策が必要である。



写真 - 1 モニュメント



写真 - 2 モニュメント



写真 - 3 正面入口



写真 - 4 障害者用トイレ



写真 - 5 障害者用トイレ



写真 - 6 階段

3.3 障害者用トイレ

写真 - 4 は、平和公園内にある障害者用トイレである。この障害者用トイレは、ドアは引戸であるが、ドアが重く開ける時に力が必要であり、車いす使用者では開けることが困難な状態となっている。そのため、ドアを開けやすくし、定期的に管理するなどの対策が必要であると提言した。また、写真 - 5 は、原爆落下中心地公園付近にある障害者用トイレである。このトイレも平和公園内の障害者用トイレと同様に、ドアが重く開ける時に力が必要な状態となっている²⁾。

2004 年現在、平和公園内にある障害者用トイレ、原爆落下中心地公園付近にある障害者用トイレ、どちらのトイレも扉が重いままであり、障害者にとって利用しにくい状態のままとなっている。ドアを開けやすくし、定期的に管理することは、比較的容易に改善できることであり、それをせずにドアを重たいまま放置していることが問題である。

3.4 階段

写真 - 6 は、原爆落下中心地公園と原爆資料館を結ぶ動線上にある階段である。この階段の手すり、踊り場のところで途切れており、連続して設置されていない状態となっている。また、明度差のあるノンスリップや注意喚起用床材も設けられていないので、視覚障害者にとって利用しにくい階段となっている。そのため、手すり

を連続させ、明度差のあるノンスリップや注意喚起用床材を設けるなどの対策が必要であると提言した²⁾。

2004 年現在、この階段には何の対策も立てられておらず、視覚障害者にとって利用しにくい状態のままとなっている。また、写真で示した階段の端には、立ち上がりや手すりなどが設置されておらず、壁伝いに降りてきた場合、転落の恐れがあり大変危険な状態となっている。手すりを設置するなどの対策が早急に必要である。

4. おわりに

今回の調査では、改善されている箇所もあったが、大半は改善されていない状態のままであった。早急に改善できる問題については改善をし、早急に改善できない問題については、サイン等を設置してバリアを回避できるようにすることが重要である。

観光都市である長崎において、各観光施設のバリアフリー化を図ることはもちろんのこと、観光施設間のバリアフリー化を図ることも重要である。観光客が観光施設をどのように巡るのかを想定し、実際に障害者や子ども等とともにそのルート进行调查することが重要である。そのことにより、本当のバリアというものが見え、誰もが安全で安心して楽しく各観光施設を巡ることができる、基礎地盤を築くことができるのである。

<参考文献> 1) 観光長崎バリアフリー創造塾：平成 14 年度成果報告書，p.1，2003．

2) 観光長崎バリアフリー創造塾：バリアフリーアトラス，pp.11 - 17，2003．